

皆頭が海に突っ込んで、海面一面に浮き上がるんです。救命胴着をつけているから浮いてくるんです。それを見て、どうしたらいいのか？と思いました。

1枚、竹の筏、長さ2メートルくらい。こういう筏があって、6枚つなげたのです。泳いでいる人を引っ張りあげたんですよ。50～60歳くらいのおじさん一人、17～18歳くらいの娘さん、小学生くらいの男の子2人。お母さん、赤ん坊を抱いて救命胴着をきて泳いでいる人、6枚の筏に赤ちゃん入れて7名乗った。遠いところから「おーい」と声が聞こえた。そしたら、偶然にも知り合いで、合計8名になったんですね。

●漂流

漂流が始まったんです。船からだいぶ流されていて、水平線の向こうに島が見えるんですね。なんとかあの島にながれつかないかな？と思っていたら。どんどん離れてしまった。朝になって、かすかに島の頭がみえるだけになった。海流にのってどんどん流されていったんです。23日の夕方に、スコールがきたんです。ざっと降ってきたの。これは、海の水は絶対飲んだらだめだ、あめが降ったら、腹いっぱい飲んでくださいと皆にいったんです。飲めるだけ飲んだんです。

ところが、夜になったら波のしぶきも変わるの。雨にぬれているでしょう。赤ちゃんが、寒くてかわいそうだった。震えているから。水夫の服をあかちゃんにくるんであげたの。お母さんが、おっぱいを飲ませているような格好をしているわけです。でも、赤ちゃんが泣くんです。大丈夫かな？とおもっていたら、お母さんが眠くて、赤ちゃんを落としたの。誰も助けられないから、海に飛び込んで助け上げたの。

24日、太平洋のど真ん中に出してしまったような感じなんです。黒潮に乗ったのが分かるの。九州方面に向かってるな。このまま筏に乗っていると助からない。自分でも見張りをやっていたので分かるんですが、見張りをするとき、何か突起物があるとよく見えるんです。竹の棒を一本ひんむいて、昼間は暑いんですよ。上着を竹の棒にひっかけて、旗のようにして揚げていたの。望遠鏡で見ても目立つはずなんです。何もなくて、筏に乗っているだけだと見つけにくい。それをやっていたんです。手で持つので疲れますよ。

漂流中に一番つらいことは眠くなること。居眠りしちゃうの。自分では、眠っちゃだめだよと怒鳴っているけど、居眠り半分なの。夜24日、2時か3時くらいですけど、どうしようもない筏の上で、うつらうつらしていたんです。そしたら、前の筏でどどんと音がして、娘さんが落ちちゃったんです。あつという間に10メートルくらい流されたの、助けてと叫んでいる。しょうがない、また飛び込んで助けにいった。溺れている人を助けるのは難しいんです。正面からいったら駄目です。後ろに回って、脇の下から手を入れて、あごをあげて、後ろから抱えて助けるの。やっとの思いで筏に戻ってきて、もう眠らないでくださいよといったの。

24日の晩それがあって、25日になった。丸3日目ですよ。北東にどんどん流されている。何にも見えない。今日、助からなかったら、この8人中で誰か死ぬんじゃないかと、最初に死ぬのは誰だろうな、赤ちゃんか小学生の子供か、そんなことを思いました。でも、自分が死ぬとは思いませんでした。自分が船員なので、遭難した場合は、人を助けないといけない義務がある、そう思っていました。

●1944(昭和19)年8月25日 救出と緘口令

夕方5時過ぎです、今日も駄目なのかなとあきらめていたとき、西の空に晴れ渡って夕日があったんです。波も静かになって、その時ですね、誰だかが、船が来たぞと声が出たの。振り返ると、はるか水平線のほうにマストが2枚あるの。どっちにいつているのかな？とみると、前のマストが左向いていて高いの。ああ、あの船は南西に向かってる。こちらは北東に向かっている。なんとか助けをもらいたい。この時ばかりは、筏の上に立ちあがって、竿をふっていたの。日暮れ間近になって、船がこちらに来たんです。助かったと皆8名全員泣きました。うれしかったです。8名全員助かって。

何時間もかかって鹿児島に入港しました。夜の8時過ぎだと思います。上陸したら、憲兵隊が待っていた。何を言うかという、船員はこっち、疎開者はこっちと、御苦労さまもなく、ただ命令だけです。同じ漂流者の名前もきけずに別れてしまったのです。

1週間ほど日赤病院で治療を受けて帰ったんです。鹿児島から汽車に載せられたんです。船員が6名。窓を全部閉めさせられて、憲兵が両方に立っていて、口をきくな、窓をあけると囚人のように扱われました。そういう思いをして、大阪まで行ったの。大阪でやっと解放されたんですが、憲兵隊が船のことは一言もしゃべってはならない、もししゃべったら軍法会議にかけられる。対馬丸のことは誰にもしゃべったら駄目だと。

(取材日:2006年4月30日)